

教師になって 34 年になる。担任を離れて久しいが、担任の頃、生徒にいつも言ってきたことがある。最初の数年間に一部の変化はあったものの、ずっと同じものである。担任として生徒に一番に言い聞かせたいことは何かと問われたら、今でも、同じ事を話すつもりだ。私にとって、指導したい不易な目標は、次の 3 つである。

「あいさつをせよ。うそをつくな。そうじせよ。」

あいさつとは、禅宗で問答をして相手の修行の程度を試すという「一挨一拶」からきたとされています。挨拶の挨は心を開くという意味であり、拶は相手に迫るという意味をもつものだと知ったとき、挨拶についての認識が一変した。あいさつは簡単なようで実は難しいというのは、そういうことだったのか。心を開かなければできない、そしてさらに相手に迫っていく覚悟がなければならぬ。そうして始めて挨拶ができるのだ。あいさつができることってすばらしいことなんですね。心を開くことができず、また、相手に迫ることもままならず、それで挨拶ができないということだったら少し悲しいです。挨拶が自然にできるような人になりたいものです。

うそをつくな。福沢諭吉翁の人生訓に「世の中で一番悲しいことはうそをつくことである」とある。初めてこれを読んだとき、違和感をもった。うそをつかれるのではなく、うそをつくことが悲しいのだと主張している。いろいろ考えて自分なりに結論を出すまでかなりかかった。本当のところは分からないが、うそをつけるというその気持ちを考えたとき、それは、自分にとって相手はうそをついても構わない人であり、人として尊重していないということであり、ひいては人間の尊厳を理解できないということである。相手を人として認めていないからうそをつける。福沢翁はそういううそをつける人の人格が悲しいといったのである。うそはつかれても自分は絶対にうそをつかない人間になろうと思った。それで、生徒にもずっと言ってきた。ときどき、生徒は「高校生にそんな小学生にいうようなことをいわないでよ」と言われたことがあった。でも、福沢翁は大人にこそ言っているのだ。どんな年代にも大切なことなのだと思う。

そうじをせよ。最初は責任を果たせ、だった。そうじにしたのは、掃除という言葉が責任という一般論よりも具体的で、なおかつ深い意味をもっているからだ。人間、生きていく上で必ず責任が伴うもの。その責任をきちんと果たしていくことでお互いが豊かな人生を送れるというもの、そういうことで話してきたのだが、実際の生徒は、そうじはさぼるし、係の仕事もままならない。そんなときに、お坊さんからそうじについてのお話を聞いたことが転換点だった。内容は、「そうじは修行の一つ。私は床を磨いているのではない。自分の心を磨いているのです。」始めて聞いたとき、すごいことだと思った。人間として私はまだまだだなと思った。係の仕事や約束を責任持ってやり遂げる、そうじや後片づけをきちんとこなすことは、社会生活をスムーズに進めていく上で必要なことであるが、同時に、いやそれ以上に、心を磨いている、自分の人格を高めていることなのだと思う。そういえば、そうじをしている生徒を見ていて思ったことがある。そうじに向かう姿勢と、勉強に向かう姿勢は同じなのではないか。嫌なことに向かう姿勢はいつでも同じだ。みなさんは、どう思うだろうか。

誰にでも大切にしていきたいことがある。それを大切にしながら自分を高めるとともに、周囲の人を大事にして、支え合いながら、歩んで行ければ有り難いことだと思う。